

《西洋史研究室の現在》

## 時代別演習と専任教員の講義

令和3年度 西洋古代史演習 担当： 准教授 藤井 崇

南川高志先生から引き継いだ今年度の古代史演習は、14名の大所帯だった。前期には、Andrew Lintott, *Imperium Romanum: Politics and Administration*, London, 1993 を講読し、後期には、受講者による研究報告をおこなった。

ローマ帝国史の研究対象は前世紀おわり頃より急速に拡大し、特に近年は、ローマ帝国民の帰属意識や属州の文化、あるいは女性の役割や自己認識といった、広義のアイデンティティをめぐる議論が国内外で盛んにおこなわれている。こうした動向の背景として、人文学にたいするポストコロニアリズムの影響や、冷戦崩壊後の「グローバル」社会でのアイデンティティ形成をめぐる議論など、さまざまな要因が考えられる。ただこうした動向が顕著になるにつれ、多様なアイデンティティ形成をおこなった古代人の日々の生活を規定した行政、裁判、徴税、社会構造、軍事といった（「伝統的」とも表現できるかもしれない）歴史的テーマへの関心が、過度に薄れているのではないかという危惧を、ささやかではあるが抱くようになった。そこで、20世紀後半までのローマ帝国の行政機構と属州統治の諸研究を手堅くまとめた Lintott の上記書籍を受講生とともに講読し、ローマ帝国史研究の基本を振り返ることにした。

また、前期の3回分を使って、受講生の1人である小山田真帆氏（博士後期課程）に自身の研究（古典期アテナイのセクシュアリティ）の土台となる先行研究を解説してもらった。小山田氏自身が、重要な先行研究3編を選び、毎回報告担当者と小山田氏が協力して議論が進められた。この作業を通じて、受講生全員が、自身の研究を基礎付ける先行研究の捉え方や重要な論点の見つけ方などについて、小山田氏から大きな示唆を得た。

後期の演習では、受講生が1週間に1名ずつ、自身の研究報告をおこなった。形式としては、研究報告をおこなう者が自身の研究にとって重要な先行研究（英語文献）を1つ指定し、別の担当者がその先行研究を紹介したのち、研究報告がおこなわれた。この作業を通じて、それぞれの研究の位置付けと意義が他の受講生にもより明確になったように思う。受講生の研究分野は、古典期から古代末期まで、また後期ローマ帝国の官僚制度からローマ帝国の食、辺境地域の獣骨の大きさまで、非常に多彩で興味深いものだった。

令和3年度 特殊講義 担当： 准教授 藤井 崇

今年度の特殊講義は「銘文からみるローマ帝国史」と題して、おおよそ前3世紀おわりから3世紀おわりまでを対象に、おもにギリシア語刻文を通じてローマ帝国史の重要テーマをたどることを試みた。他専修の学部生も参加することが前提なので、ギリシア語の原

文を用いることはせず、英語あるいは日本語の翻訳を用意し、講義を進めた。

授業の冒頭では、刻文史料と文献・パピルス史料との比較を通じて、文献史料より広範な地域と社会層の実態を明らかにする一方、パピルス史料よりも強い公共性とそれにとまなう偏向を持つという、刻文史料の特徴を解説した。その後、授業は、ローマ帝国が東地中海・近東地域への軍事的、政治的介入を本格化した前3世紀おわりを起点とし、おおよそ年代順に重要なテーマを取り上げていった。

まず、前3世紀から前2世紀おわりにかけては、ヘレニズム王とローマ帝国の関係とその変化（e.g. ピリッポス5世のラリサ市への書簡と都市の決議）とローマ帝国とギリシア人都市とのネットワークの形成（e.g. ランプサコスとテオスの使節団）に特に注目した。次に、前2世紀から帝政成立期に関しては、ギリシア人がローマ内戦にうけた影響とそこへの関与（e.g. アプロディシアスのローマへの軍事協力）、オクタウィアヌス／アウグストゥスとギリシア人有力者との個人的関係とその意義（e.g. アプロディシアスのゾイロス）、そして「神君アウグストゥスの業績録」のギリシア語翻訳をめぐる問題を扱った。そして、帝政期に関しては、帝政期のギリシア人の都市制度（e.g. クレタ島諸都市のヘレニズム期から帝政期への変化）、皇帝崇拜、エヴェルジェティズム（e.g. エパメイノンダスやオプラモアス）、祝祭（e.g. エペソスのサルタリオス）、ローマ市民権（e.g. ラテン語刻文であるリヨン・タブレット）、宗教・心性・感情などを、幅広く検討した。

### 令和3年度 西洋史学演習Ⅱ（西洋中世史演習） 担当： 教授 佐藤 公美（甲南大学）

個別研究を意義付けるものの一つは専門的トレーニングが可能にする対話であり、その体系を持つ枠組みが生産的に機能するか否かは学術全体の活力に影響する。「中世史」もその一つだ。しかし現在の西洋中世史学の水準に相応した専門教育は未だ日本のカリキュラム内に十分な場を得ておらず、むしろ逆風が吹いているのではないか。そんな中このフィールドをいかに耕すか——。そう考えた結果、今年度の演習は中世史の基本問題に新しい研究書と基本的文献を通して向き合うというオーソドックスな内容になった。テキストは、Charles West, *Reframing the Feudal Revolution: Political and Social Transformation Between Marne and Mosell, c. 800-c. 1100* (Cambridge University Press, 2013) である。はじめに1990年代のPast & Present誌上の「封建革命」論争を読み込んだ上でこのテキストへの取り組みを開始した。

停滞した「封建革命」論争への著者ウェストの処方箋は、時代と地域の越境による「紀元千年」前後の二項対立的解釈図式の克服にある。彼はカロリング期と中世盛期の研究上の分断を両者に跨る時期設定で乗り越えるとともに、地域的には、上ロタリングア・シャンパーニュという現在の境域を対象に、過度な限定にも一般化にも陥らない中間的スケールを設定する。学術コミュニティも越境し、フランス学界中心の「封建革命」論争に対し、

ドイツ学界のシンボリック・コミュニケーション研究の手法が導入される。江川温先生も指摘するように、複数の視点を交差させる手法は私たちの「西洋史学」に活かされようし（江川温「これからの西欧中世史研究のために——一二世紀以前のフランス中世史研究の視点からの提言——」『鷹陵史学』第47号、2021年、5-23頁）、また近年の西洋中世政治文化史研究の中軸的方法論が1本の糸で封建制／封建社会論につながれた意味も大きい。明快ながら行間の彫りが深い著作である。受講生の議論は個別的知識から方法論や歴史認識に関わる本質的論点まで広がった。人類学的方法論の評価、証言の不在の意味、「暴力」の同時代的了解と中世認識の関係、儀礼や史料の定型表現の評価、中世的「本質」は存在するか、二項対立から脱却するためには何が有効か…。一生かけても尽きない議論を、学生・院生が忌憚なく交わせる限り歴史学は続く、と思わせてくれた。後期は個人研究発表を主としつつ、一部を史料論の学習に当てる試みも行った。演習の一部では限界があるものの手応えは確かであり、体系的な史料論教育導入の喫緊の必要性を痛感した。

さて、封建制と封建社会論再考に授業で取り組むに際して、Susan Reynolds, *Fiefs and Vassals: The Medieval Evidence Reinterpreted* (Oxford University Press, 1994)を久しぶりに手にとった。私が学部4年次の中世史ゼミのテキストである。当時20代だった先輩や同輩の担当割り当てやら、先生の出張やらのメモを焼けたページの余白に見ると、時を飛び越えるとはこういう事かと思う。将来、現在の学生・院生が「かつての若者」になった時、彼らの手元には一体何が残されているのだろうか。

### 令和3年度 西洋史学講義 担当： 教授 小山 哲

本講義は、2回生から受講できる西洋史学の入門講義である。ヨーロッパ世界では、歴史をどのように認識してきたのか。また、歴史を研究する視角や方法は、時代の変化にともなって、どのように変化してきたのか。古代から現代までのヨーロッパにおける歴史認識の歴史を、各時代の全般的な状況をふまえながら概観し、それぞれの時代の歴史叙述の特徴や、歴史研究の方法をめぐる議論を紹介した。

私はこの講義を数年おきに担当してきたが、本年度はこれまでとやり方を変えて、近現代のヨーロッパの歴史学の展開（18世紀から現在まで）について先に解説し、その後で古代に遡って近世までの歴史のとらえ方の変遷について説明する、という順序で講義を組み立ててみた。コロナ対応のためにオンラインでリアルタイム＋オンデマンドの組み合わせの講義形態だったので、従来の教室での授業と単純な比較はできないが、古代から現代まで時代を追って話をするよりも、途中で脱落する受講生の比率が小さかったように思う（これまでは、時代順に話をしていくと、中近世のあたりで相当数が教室に出てこなくなった）。

入門篇なので講義内容の大枠は変わらないが、担当するときには、新しい話題もなるべくとりあげてみたいと考えている。本年度は、井上浩一先生のご著書を参照してアンナ・コムネナの歴史叙述を話題に組み込み（授業後に受講生から「マンガ化されているので、

そちらもぜひ読んでください」と熱く薦められた)、「記憶の場」に関連して韓国のイム・ジヒョンの最近著『犠牲者意識ナショナリズム』(2021年8月刊、韓国語。日本語訳が進行中)に触れることができた。

### 令和3年度 西洋近世史演習 担当： 教授 小山 哲

「宗派化されたヨーロッパ」(H.シリング)、「複合君主政のヨーロッパ」(J. H.エリオット)といった表現にみられるように、宗教社会史や国制史における近世的特質は、しばしば空間としての「ヨーロッパ」の存在を前提として研究されてきたが、そもそも「ヨーロッパ」が地理的な概念として広く用いられるようになり、地域の名称として社会に定着したのが、15世紀から18世紀にかけてのことであった。近世の人びとが「ヨーロッパ」という地域概念を用いるとき、その空間的な外延と内包をどのように認識していたのか。この地域概念には、どのような政治的・宗教的・文化的意味が含意されていたのか。近世の「ヨーロッパ」意識を研究するためには、どのような史料にもとづき、どのようなアプローチを採用することが有効か。

本年度は、こうした問題を考えるために、N. Detering, C. Marsico and I. Walser-Bürgler (eds.), *Contesting Europe: Comparative Perspectives on Early Modern Discourses on Europe, 1400-1800*, Brill: Leiden - Boston, 2020 をテキストとしてとりあげた。比較的若い世代の近世ラテン文献学の研究者たちが編者となり、ヨーロッパ大陸諸国の歴史学、地理学、文学、書誌学の研究者が寄稿して構成された学際的な論文集であり、近世ヨーロッパ研究の分野で領域横断的な対話がどのように可能かを考えるうえでも示唆的な本である。“Contesting Europe”というタイトルには、「近世の人びとがそれをめぐって議論していたところのヨーロッパ」と「そのような近世のヨーロッパ概念について現代の研究者が多角的に議論すること」という二重の意味がおそらく込められている。編者たちはシャントル・ムフの「闘技的多元主義」(agonistic pluralism) の概念を援用しながら近世的な言説空間としての「ヨーロッパ」の構築のプロセスを動的に認識しようとしており、Brexit 以降の「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」研究の1つの方向性を読みとることができる。

後期の授業では、例年と同様に、受講生の研究発表をもとに議論する機会を設定した。とりあげられたテーマは、東地中海における東西両教会間のある関係をめぐる論争、王政復古期イングランドにおける怪物観の変容、フランスにおける宗教改革とユマニストのかかわり、エドワード6世時代の2つの反乱(西方反乱とケットの反乱)、宗派化の視点からみた16・17世紀のボヘミア、イギリス近世の記憶(アルマダ、クロムウェル)の変遷、コロンブス交換、など、本年度も多様であった。演習での議論が、受講生各自の課題の自覚と今後の研究方向の明確化につながっていくことを願っている。

後期の授業中の議論のなかで、歴史学における反実仮想命題のとり扱いが話題となった。そこで、個別発表が1回りした後、1月の2回分を使って、Ph. E. Tetlock, R. N. Lebow, and G. Parker (eds.), *Unmaking the West: "What-If?" Scenarios That Rewrite World History*, Ann Arbor

2006 から、編者による序文と C. M. N. Eire による Ch. 4 “The quest for a counterfactual Jesus: imagining the West without the Cross” を読んだ。「歴史における If」は話題としては盛り上がるテーマだが、学術的な水準を保って議論するには工夫がいる。Tetlock と Parker は、「歴史における If」を禁じ手とした E. H. カー『歴史とは何か』を批判して、反実仮想の設定が歴史研究者にとってもちうる問題発見的な意義を強調している。とはいえ、この手法で論文を書いて伝統的な歴史学の専門誌に投稿しても、採用されるかどうかは微妙であろう。結局、私たちの議論は「*What-If-Review* という学術雑誌がもしあれば」という反実仮想に行き着いた。

本年度の演習の授業が終わってからほぼ 1 か月後に、ウクライナでの戦争が始まった。もしこの演習がヨーロッパでの戦争の時期に重なっていたら、「ヨーロッパ」や「反実仮想」をめぐる私たちの議論はどのようなものになっていただろうか、とふと考える。(3 月 31 日記)

#### 令和 3 年度 西洋史学演習 IV (西洋近代史演習) 担当： 教授 金澤 周作

精読のテキストとして取り上げたのは、Paul Readman, Cynthia Radding and Chad Bryant (eds.), *Borderlands in World History, 1700-1914* (Palgrave Macmillan, 2014) である。一般に「近代」という区分で切り取られる世界が、西洋の影響を強く受けて形成された国民国家や(国民)帝国の時代であったことは承認されているが、そのため、研究が特定の国家や帝国を単位とするものになりがちになる。それを乗り越えるために、グローバル・ヒストリーやローカル・ヒストリーの可能性が探究され、トランスナショナル・ヒストリーの視角も採用されるようになった。本書はこのような乗り越えを目指す共同研究の成果である。国家や帝国その他の統治の制度的仕組みを備えた機構が「支配下に置いている領域を線で区切り、拮げ、防衛する場」としての「ボーダーランド(境界域)」に注目し、史料に基づいた世界中の事例研究を通じて、そこが有する独特の境界性とそこに生きる人々の社会的な経験に迫る。序章と結論で明確に枠組みを設定しているので迷うことはないが、14 本の実証論文が扱う範囲は目が眩むほど多岐にわたる。

ヨーロッパだけでキーフ/キエフ周辺域(ポーランド=リトアニア-ロシア)、ライン川両岸域(ナポレオン期フランス-ドイツ諸領邦)、上シレジア(ドイツ帝国-ロシア)、そしてイングランドとスコットランドおよびウェールズの接する地域に光があてられる。その他、アメリカ大陸(奴隷州-自由州の境界域、西部開拓の「フロンティア」、メキシコなど)、東南アジア島嶼部、カリブ海域、アフリカ(リベリア、モンバサ)、オーストラリアのさまざまなボーダーランドが並び、圧巻であった。個性的な地理的環境のなかで、諸権力・諸文化が不断に遭遇・衝突・共存・混淆を繰り返してある方向に秩序形成していくダイナミックな時空間が、そこで生き抜く人々の息遣いととも立体的に浮かび上がってくるような、力のこもった論文集であった。受講生もそれぞれに刺激を受け、ひじょうに活

発な議論が毎回行われた。

後期の最初の数回まではテキストを読んでいたが、その後は例年通り自由発表を行った。本年度は、新しく始まった交流制度によって、東京大学の大学院でブリテン史を研究している梅田建人さんと石光真理さんがオンライン受講し大いに貢献してくれて、京大の学部生・院生たちとよい結びつきを作ってくれた。

ハイブリッド方式にも慣れ、対面の時期も全面オンラインに移行した時期も、スムーズに演習を行うことができた。

### 令和3年度 西洋史学特殊講義 担当： 教授 金澤 周作

19世紀の海域世界について概観する文章を書く必要があったため、その準備も兼ねて、今年度はイギリスを中心にして「海域史」を講じた。前期は、これまで行われてきた主要な海域史・海事史の大きな流れといくつかの理論的な把握の試みを紹介した後、中世以前とも近代以降とも異なる、「近世」におけるイギリスと海の関わりを、18世紀に軸足を置きながら、適宜その前後に視野を広げて解説した。具体的には、船乗りの社会史を確認した上で、重武装した多数の巨大木造帆船で構成される海軍とそれを支えた財政軍事国家、近世ヨーロッパに固有な、海の戦争のもう一方の立役者であった私掠行為、重商主義の18世紀に「黄金時代」を迎えた密貿易、頻発した海難をめぐる諸問題を、先行研究といくつかの史料（船乗りのエゴ・ドキュメントなど）、そして自分がかつて行った実証研究の成果を用いながら、順に論じた。

後期には、前期の「近世」海域史の特徴と対比する形で、19世紀から20世紀初頭、すなわち狭義の「近代」における海域史の個性と思われるものを、解説した。近世海域においてイギリスは1プレイヤーにすぎなかったが、近代海域にゲームマスターがいたとすればそれは明らかにイギリスであった（現代になると再び1プレイヤーになる）。この時代を理解するためには技術的な新機軸を歴史像に組み込まなければならない。講義ではイギリスの圧倒的なプレゼンスを踏まえつつ、蒸気機関、鉄製船体、海底電信ケーブル、灯台、スエズ運河、各種の海図作成について、それらの相互関連に留意しつつ詳しく説明した。また、定期汽船会社、旅客事業、労働運動などの社会経済史、検疫制度、私掠禁止、船舶衝突予防、領海観念、建艦競争などをめぐる法制史・政治外交史、そして捕鯨船、移民、火夫・石炭運搬人に関する社会文化史にも触れた。

特殊講義というにはあまりに総花的な内容であったが、自分の理解を整理する上でも有意義であったし、受講生にとっても、オンラインの時には双方向的な議論の場があったり、年間を通じてヴィジュアル資料を多く見られたりしたので、それぞれの関心と触れ合う機会が多かったのではないかと思う。